



慶應義塾大学ビジネス・スクール

地方銀行の支店長が抱える悩み

5

「支店長の職を務めていく自信がもうない。」

利根 充希（りね みつき）が、支店長になって3年が経過したころ、利根支店長は人事部に支店長職を解いてくれるよう頼む決心を固めていた。

利根は新卒で地方銀行であるCに総合職として入社した。C銀行は、地方銀行の中では中堅規模であり、従業員数は約1500人、支店数は県内80、県外15であり、地元企業の発展に貢献するのがミッションである。2010年以降の新卒採用実績は80人前後であり、そのうち総合職が35人程度である。 10

1990年代当時、男性優位な職場であった金融業界、とくにその傾向の強い銀行においては、総合職で入社する女性はとでもめずらしかった。利根が入社した年次の総合職は全部で70人であるが、女性は、利根を含めてわずか3人であった。最初の配属先は、A市の中心地にある比較的規模の大きなS支店であった。A市は、人口約33万人の都市であり、周りには学校、スポーツ施設が多数ある。個人のお客としては新しい住宅街ということもあり、医者や中小企業の社長といった人たちが住んでおり、資産運用や相続対策に熱心な人が多かった。法人としては公的機関の振込み利用客や、飲食店が多い。 15

配属後は、一貫して融資業務に携わっていた。利根は、明るく、気さくな性格であったため、顧客からの評判もよく営業成績も抜群だった。また、業務処理にも優れていたため支店長を含め職場の上司や同僚からの信頼も厚かった。 20

彼女のキャリアであるが、最初は、事務統括部という部署で営業店のオペレーション向上のための事務改善・合理化に関するルール策定を担当した。支店からは事務オペレーションについて日々、様々な問い合わせがある。その問い合わせを自分の中で整理しながらマニュアルに落とし込めそうな点があればその都度マニュアルをアップデートする。比較的女性職員が多い部署であり、気を遣わず仕事に集中できた。監督省庁とのやり取りも頻繁にあるため調整力も身についた。ここに約6年間所属した。 25

慶應義塾大学大学院経営管理研究科准教授 林 洋一郎および同研究科専任講師 大藪 毅の監修のもと、同研究科 M37 の畑澤 政教が作成した。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。 30

Copyright © 林 洋一郎、大藪 毅、畑澤 政教（2016年3月作成）